九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

目加田誠旧蔵一九三四年大学講義プリント：（三）黄節篇

木村，淳美
九州大学大学院人文科学府：修士課程

https://doi.org/10.15017/4363583

出版情報：中国文学論集. 49, pp.146-153, 2020-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

目加田誠旧蔵一九三四年大学講義プリント

――（三）黄節篇

木村淳美

黄節（一八七三～一九三五）、字は玉昆、または晦聞、号は純熙。広東順徳の人。辛亥革命期に活躍した学者の一人であり、鄧実らと共に『国粋学報』を創刊した。また柳亜子・葉楚傖ら革命文士と共に「南社」を結成し、詩文によって革命を鼓吹した。一九一七年に北京大学教授として中国詩学を講じ、清華大学にも出講した。その後一九二八年に広東教育庁長を務め、一九二九年、北京大学教授に復帰した。著書に『漢魏楽府風箋』『魏武帝魏文帝詩注』『曹子建詩注』『阮歩兵詠懐詩注』『謝康楽詩注』などがある。また詩集『蒹葭楼詩』二巻がある。

顧炎武（一六一三～一六八二）、字は寧人、号は亭林、江蘇崑山の人。清朝考証学の祖として知られる。一六四四年の明滅亡後、清朝に帰順せず、明の遺臣としての生涯を貫いた人物である。その詩集『亭林詩集』五巻には明滅亡以降の作品四百二十六首が集められている。清末の徐嘉の注釈『顧亭林先生詩箋注』十七巻があり、民国初期には、革命派の詩人たちがその詩を称賛し[1]、晩年の黄節も愛読していたようである[2]。

目加田誠所蔵の「顧亭林詩」の講義プリントは計三十枚、その中に詩三十首を収録。『亭林詩集』の順序に従い、黄節が独自に取捨選択して排列されている。各詩には原注や徐嘉注の引用、顧炎武の門人である潘耒の原鈔本の異同についての言及に加え、黄節による補注や評が付されている。特に第一首「大行哀詩」の評においては、黄節が師事していた簡朝亮の言葉を引いて「嗚呼、天下豈に国亡びて学亡ぶ者有らざらんや。（嗚呼、天下豈不有國亡而學亡者哉。）」と言う。これは顧炎武が『日知録』巻十三「正始」[3]において「亡国有りて、亡天下有り。（有亡國、有亡天下。）」と提起し、国家の滅亡には、国号が改まるという外面的な変化（亡國）と、風俗や倫理感といった内面的

文化的な衰退（亡天下）とがあり、「天下」を保つことができてこそ「国」を保つことができると述べていることとも通じる。また『国粋学報』において、西洋や日本の学問に溺れ、自国の学問が損なわれている現状に警鐘を鳴らす黄節の態度とも一致する。[4]「詩は志を言う」[5]という中国古代の精神を保ちつつ、今を生きる現実の人々に向けてその心情を吐露した顧炎武の詩作に対して、黄節は共感を抱いたのであろう。[6]なお講義プリント最終頁の最後には「贈潘節士檉章」の題名のみが見えるものの、続きのページは残念ながら現存しない。

目加田誠の回想録に拠れば、一九三四年頃に黄節が顧亭林詩の講義を行なっていたことは確かであろう。[7]ただし、『北平日記』における黄節の講義に関する記述を確認すると、北京大学での聴講手続きを終えた一九三四年九月二十八日の記録に「余は黄節、馬廉氏を聴く。」とあるものの、その後は十月三十一日に「黄節の魏武帝詩の講義をきく。言葉少しも解らず。」とあるのみで、次に見えるのは翌年一月二十四日に黄節が他界したという記録である。これは北京大学の馬廉、中国大学の孫人和・呉承仕の講義を傍聴したこと、またその予定であったが行けなかったことなどが定期的に記録されていることとは対照的である。「顧亭林詩」の講義プリントには書き込み等も無い状態である点から見ても、この講義プリントは目加田誠が実際に授業を傍聴してのものではなく、講義資料のみを入手したものとも考えられる。

黄節は顧亭林詩に対し箋注を作ったものの未定稿に終わっている。[8]その点において、この講義プリントは資料的価値があると言えよう。

注

（1）倉田貞美『清末民初を中心とした中国近体詩の研究』（大修館書店、一九六九年）参照。

（2）前掲の倉田氏の著書によれば、黄節は章炳麟「黄晦聞墓志銘」（『制言』第二期）に「最後に崑山顧氏の詩を好む。」とあり、また張爾田「蒹葭楼詩序」に彼自身「元遺山及び屈翁山・顧亭林に比す。」と述べられている。

（3）国学基本叢書『日知録』（商務印書館、一九三三年）。

（4）例えば『国粋学報』第一期「国粋学報叙」（国粋学報館、一九〇五年）において、「吾が中国に国する者は外族専制の国にして、吾が民族の国に非ざるなり。吾が中国に学ぶ者は外族専制の学にして、吾が民族の学に非ざるなり。吾の国の学の亡ぶるや殆ど久しいかな。（國於吾國者外族專制之國、而非吾民族之國也。學於吾中國者外族專制之學、而非吾民族之學也。而吾之國之學之亡也、殆久矣乎。）」と述べる。

（5）『日知録』巻二十一「作詩之旨」の冒頭に「舜曰く、詩は志を言う。此れ詩の本なり。（舜曰、詩言志。此詩之本也。）」とある。

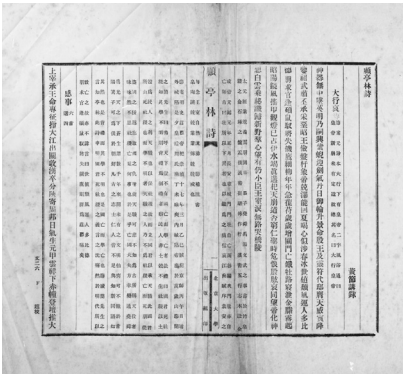
（6）『日知録』巻二十一「詩体代降」において、「詩文の代々変ずる所以は、変ぜざるを得ざる者有ればなり。……故に似ざれば則ち詩たる所以を失ひ、似れば則ち其の我たる所以を失ふ。（詩文之所以代變、有不得不變者。……故不似則失其所以爲詩、似則失其所以爲我。）」という。

（7）『随想　秋から冬へ』（龍溪書舎、一九七九年）に、「当時北京大学には黄節先生がいて、顧炎武の詩の講義をしていた。」と見えるほか、『中国文学論考』（『目加田誠著作集』第四巻、龍溪書舎、一九八五年）中の「論文集のあとに」において「北京大学では、黄節氏の顧炎武の詩の講義」を聞いたとある。

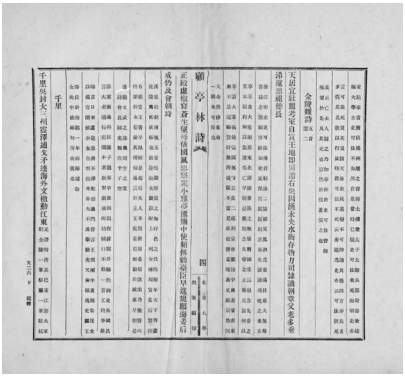
（8）橋川時雄『中国文化界人物総鑑』（中華法令編印館、一九四〇年／名著普及会、一九八二年復刊）に「曹父子詩及び顧亭林詩に対し箋注を作ったが未定稿である。」と紹介されている。

【付録】講義プリント全書影
（3）黄節「顧亭林詩」

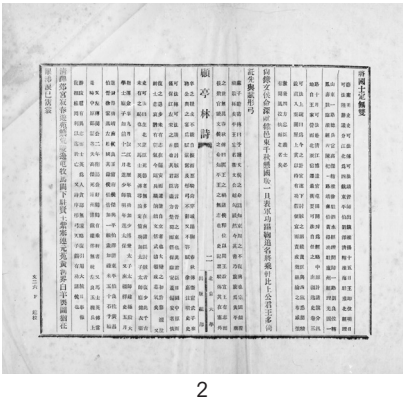
目加田誠旧蔵一九三四年大学講義プリント（三）黄節篇



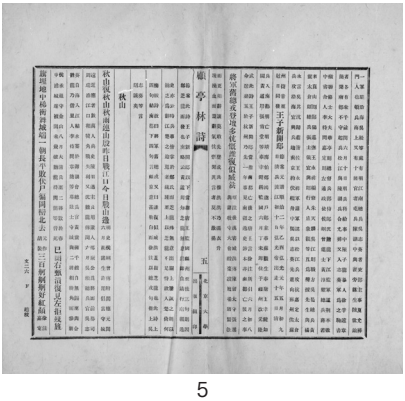
1



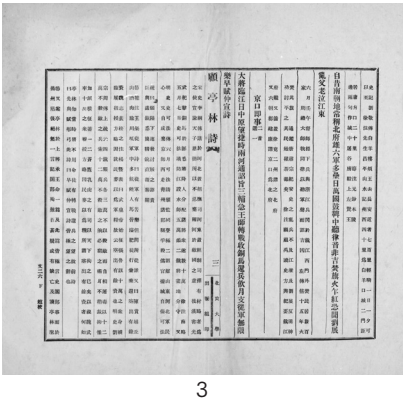
4



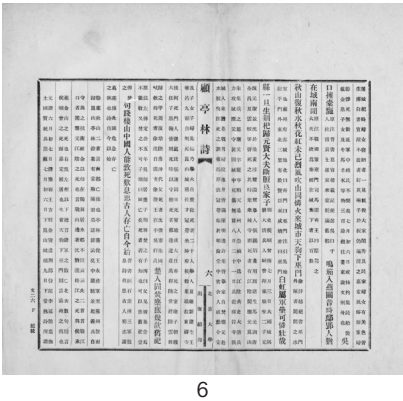
2



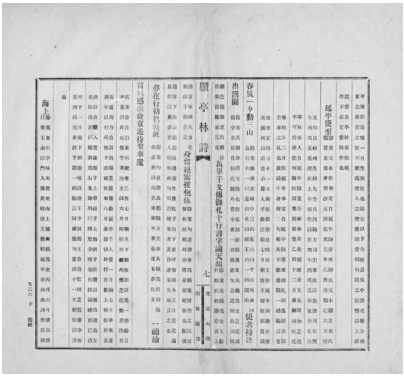
5



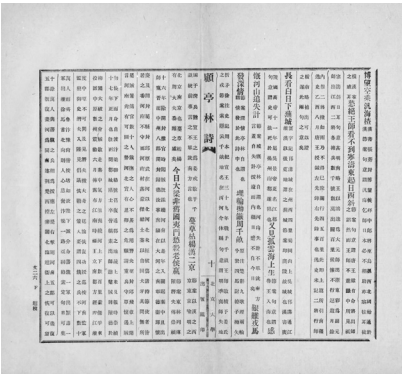
3



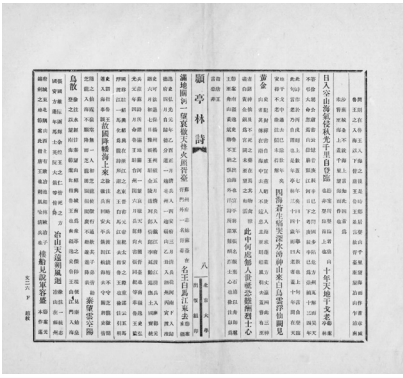
6



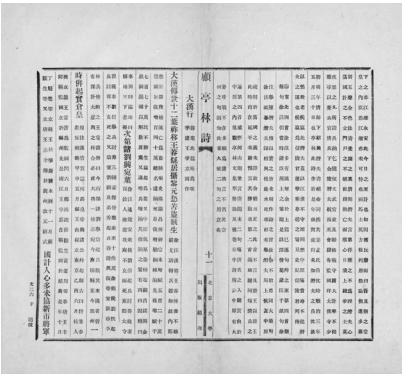
7



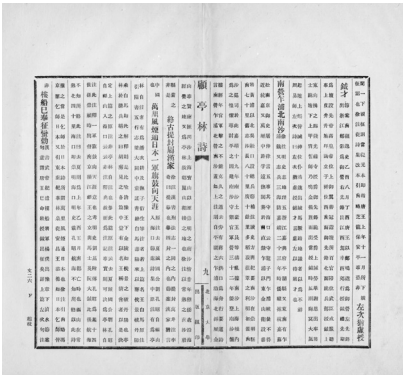
10



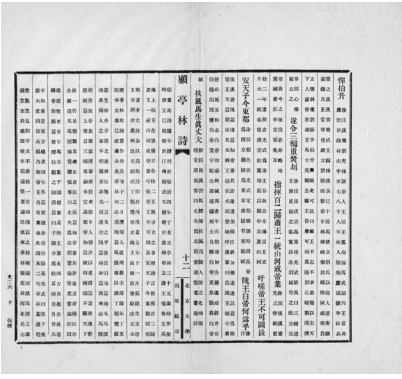
8



11

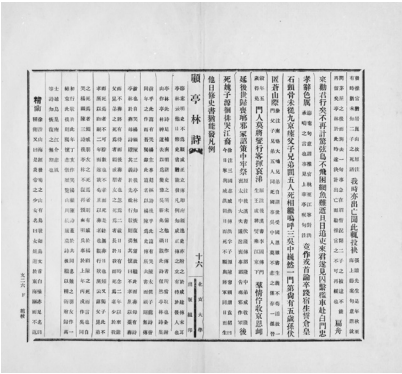


9

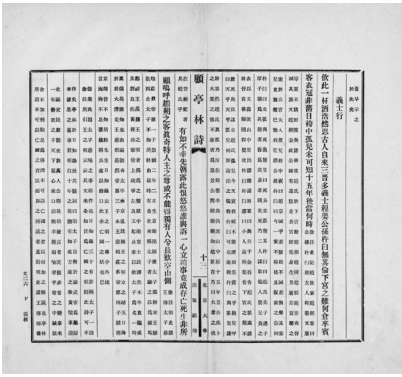


12

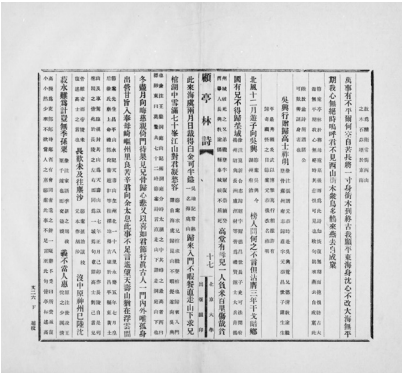
目加田誠旧蔵一九三四年大学講義プリント　(三)　黄節篇



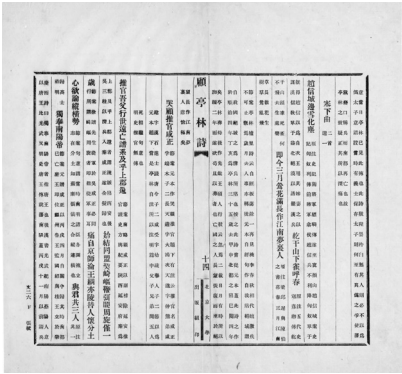
16



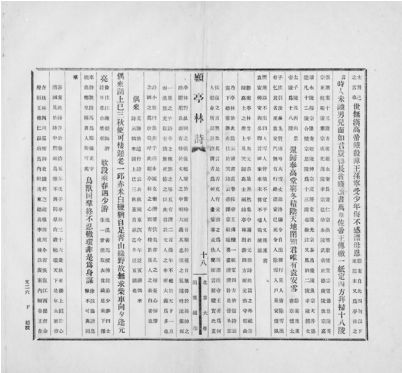
13



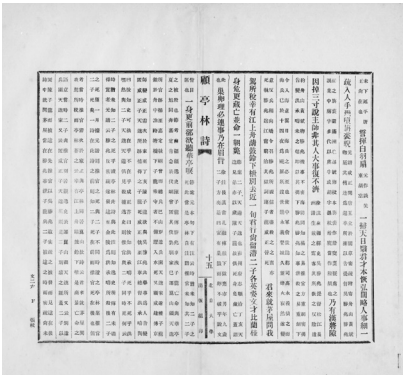
17



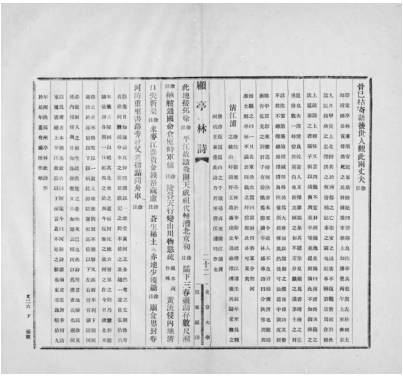
14



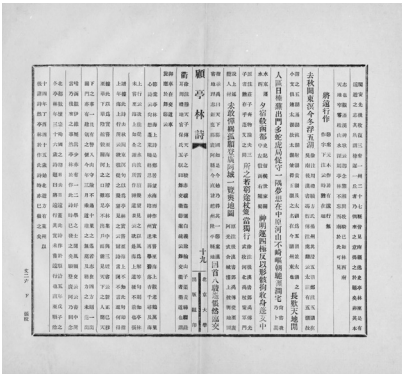
18



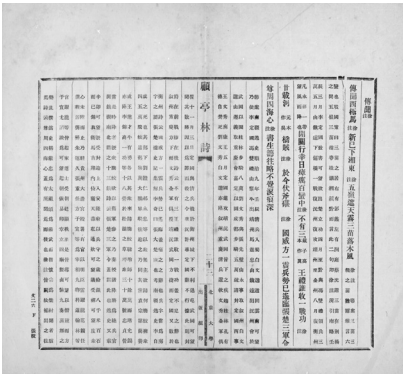
15



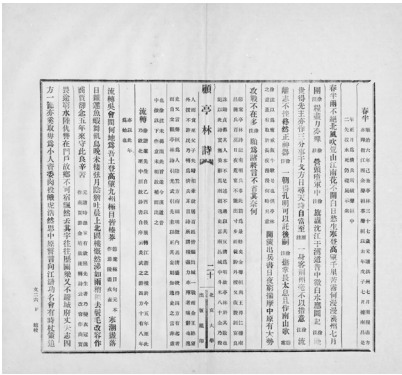
22



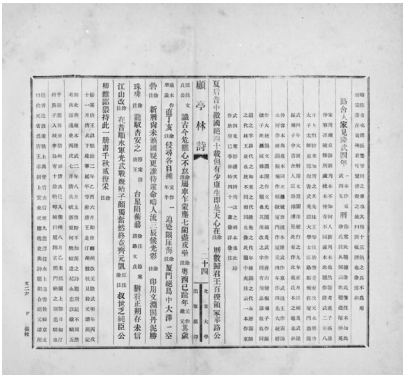
19



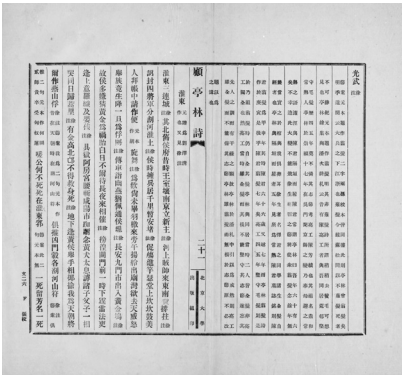
23



20

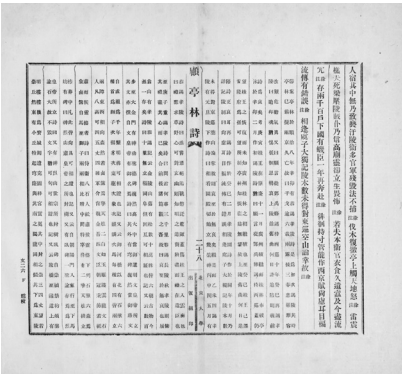


24

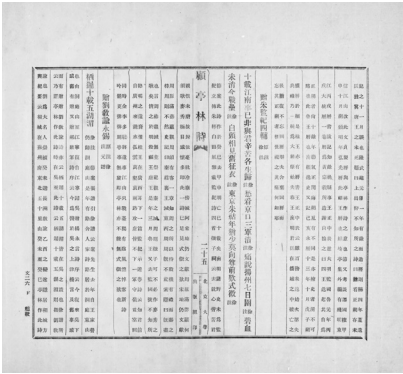


21

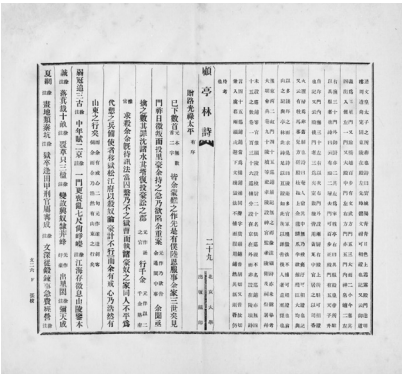
目加田誠旧蔵一九三四年大学講義プリント　(三)　黄節篇



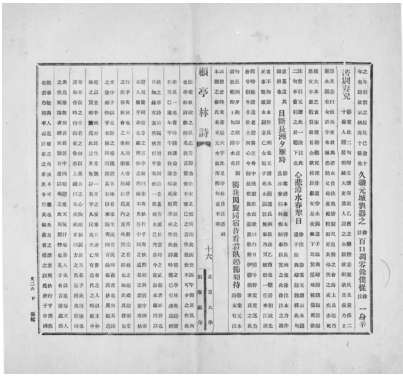
28



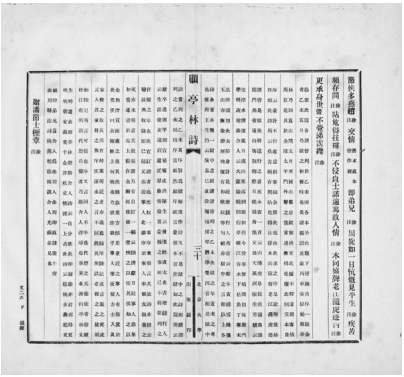
25



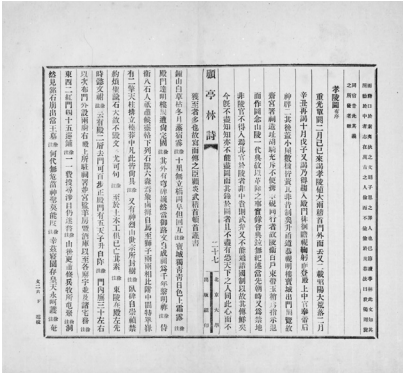
29



26



30



27